博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　加藤雄二

学位申請者　トウ・ムビ（Teng Mengwei）

論　文　名　小説家三島由紀夫の誕生 ―遍歴時代小説における言葉と〈現実〉

【審査結果】

事前審査は 2025 年 11 月 14 日にオンラインで実施され、最終試験は、2026 年 6 月 27 日に台風の影響を勘案して Zoom により 14 時から約 2 時間かけて実施された。審査委員は、加藤雄二（主査）、土田耕督、イリナ・ホルカ、柴田勝二（本学名誉教授）、友常勉（主任指導教員）である。最終試験の質疑応答におけるトウ・ムビ氏の受け答えは終始誠実かつ真摯なものであった。以上の論文審査と口述による最終試験（公開審査）の結果、審査委員会は、全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

トウ・ムビ氏の学位申請論文「小説家三島由紀夫の誕生―遍歴時代小説における言葉と〈現実〉」は、三島由紀夫のいわゆる「遍歴時代」に属する「花ざかりの森」から『潮騒』に至る主要作品群を対象とし、その文学的変遷を、ロマン主義的傾向から古典主義的達成へと至る過程に分析の焦点を定めつつ、同時にディオニュソス的契機を手掛かりとして、ロマン主義的かつ古典主義的な諸傾向を、相互に規定し合う生成的連関として捉え直そうとするものである。いいかえれば、三島文学における美学的推移を、言語による表現の不可能性を極限まで推し進めるロマン主義的衝動と、その不可能性を形式の内部に定位しようとする古典主義的意志の作動として、見極めようとするものである。なお構成は以下の通りである。

【論文の構成】

序論
一、言葉と現実の遭遇
二、ディオニュソス的なもの
第一章　ロマン主義者の出発―「花ざかりの森」の〈憧れ〉と言語―
はじめに
一、過去への郷愁
二、超自然への憧れ
三、神へ向かう心情
四、イロニーと無限

おわりに
第二章　オルギアとしての戦争体験―「哲学的日記」「中世」の〈終末〉―
はじめに
一、生と死の逆説
二、殺人者対海賊頭
三、舞踊する身体
四、永遠の現在
おわりに
第三章　「通過儀礼」の経験―「岬にての物語」『盗賊』の遊びと死―
はじめに
一、「生の勝利」から「死の勝利」へ
二、未完成の通過儀礼
三、遊び手の意識
おわりに
第四章　告白のメカニズム―『仮面の告白』の〈外面〉―
はじめに
一、同性愛の彼方
二、大地への暗い生命力
三、精神と肉体の対決
四、告白の仮面劇
おわりに
第五章　唯一神への抵抗―『愛の渇き』の流動性―
はじめに
一、避病院の時空構造
二、欲望の流れ
三、唯一神なき人間の幸福
四、「言葉」に対する葛藤
おわりに
第六章　対立の超克―『禁色』の対話性―
はじめに
一、再び同性愛の世界へ
二、対話的言葉
三、マンの影響と市民性
おわりに

第七章　古典主義時代の総決算―『潮騒』と表層への動き―

はじめに
一、自足する主体
二、形式の反復
三、戦後社会の浮上
おわりに
結論
参考文献
初出一覧

【審査の概要及び評価】

本論文は、全体として総じて抽象度の高い文章で、哲学・思想的文脈に眼を配りながら、三島の初期作品を精緻に論じた労作である。『花ざかりの森』「哲学的日記」「中世」』「岬にての物語」『盗賊』『仮面の告白』『愛の渇き』『禁色』『潮騒』のそれぞれの作品に対して、分析の力を弱めることなく取り組んでいる努力は評価に値する。さまざまな思想体系を視野に入れながら、各テクストに対して読みの可能性を提示しようとする姿勢は力業であり、学位論文の研究水準に達しているといっていいであろう。

ただしその理論的な枠組みにおける野心的な挑戦の反面、あるいはその帰結として、本論文はいくつかの課題を有している。

まず方法論についてである。鍵となっている「古典主義」への志向は、三島の浪漫主義の内実というべきこの主題とむしろ逆行する関係にある。そこで両者の関係性をさらに焦点化すべきであったと思われる。また論文の構成が、タイトルに示される主題の探求のために演繹的になされているというよりも、個別に書かれた各章の論文をまとめる過程で帰納的になされているために、全体を通して一つの主題が探求されているという印象が希薄になっている。

方法論において、さまざまな哲学的・思想体系を視野に入れている点は評価できる。しかしその反面、各章における具体的な分析や、各テクストに対する個別的かつ新たな読みの可能性の提示はけっして明確ではない。すなわち、ほとんどの章における分析は、言葉と現実の関係性、言葉の可能性と不可能性、言葉が内在的に孕む裂け目、さらには言葉の限界や言語的意味と形式的意味の問題など、いずれも同様の結論へと収斂してしまい、それぞれのテクストに関する独自の解釈が十分に提示されていないように思われる。その結果、アポロン／ディオニュソス、ロマン主義／古典主義といった概念を前提としてきた枠組みの精読の上、それらの概念の「不安定化」「再配置」、あるいは構造全体の脱構築に至るといった、本論が目論む作業は、いささか不要な障害物を自ら立て、自ら壊すような営みに感じられる。本来的には、三島の〈古典主義〉とは何かという問いに対する解答は、本来ならば各作品の解釈を通して最終的に導き出されるべきものである。それを序論において作品解釈を抜きにして仮に措定した上で、所与の前提として作品（とりわけ第 4 章『仮面の告白』）の解釈に適用しているように思われる。これは論考の順序として転倒しているだろう。序論においては三つの観点が設定されている。すなわち①言語の〈腐蝕作用〉、②〈古典主義 vs ロマン主義〉、③〈アポロン的なもの vs デュオニソス的なもの〉である。ただし①と②③とがどのように同列化されうるのか、そもそも同列化してよいのかが検討されていない。これと関連して、①言語の〈腐蝕作用〉と言語自体の〈腐蝕〉というメタファーの主意が、的確にパラフレーズされていないのではないか。

また、本論において「反リアリズム」の実践として評価される三島の文学だが、「リアリズム」として想定されているのは私小説、あるいは私小説的な「内面の告白」を重視とした日本近代文学の「主流」であると思われる。しかしこれらは、立場や見方を変えれば、必ずしも「主流」ではなかったはずであり、漱石や鴎外をはじめ、徳田秋声や岩野泡鳴、それから芥川、太宰、横光利一などなど、「リアリズム文学／realistic fiction」を書きながら、透明な言語によって内面が直接描かれうるのだ、といった妄想に加担しなかった表現者も数えきれないほどいた。これらの小説家も、言語と現実とのあいだに存在する、埋めがたい亀裂に気づきながらも、なお言葉で表現しようとしていた。三島の「反リアリズム」はこれらの表現者の立場とどう関係したか、また三島の言葉と現実に関わる実践は彼らのそれとどう違っていたかが明らかにされるべきだろう。

本論文は「言葉の不可能性を自覚しながら、その限界を引き受けつつもなお〈書く〉行為」をつらぬいた、あるいは「現実の再現ではなく、言語が自己の破綻へと接近する極限」を実践したという三島文学に価値を見出しているが、「文体のリズムや響き、沈黙や空白といった非意味的契機」をより具体的に探るべきものであっただろう。『愛の渇き』の自由間接話法の分析、あるいは『潮騒』の映画的描写法についての分析はあるのだが、後者に関しては例えば「美術用語」としての描写、文学の用語としての描写、そして映画の用語としての描写の差異が明確に定義されず、分析自体がいささか説得力を欠いている。あるいは、「花ざかりの森」の分析の際、日記、引用、語り直しといった工夫に着目し、一つの主体が言葉によって体験を整理する際に、もう一つの主体が「書物」として受け取り、再整理し新たな書物として生成する過程に目を向けることで、二重三重に隠蔽されていく内面・内実と言葉（表象・表現）の関わりについて考察が加えることが可能だろう。

加えて、ロマン主義、反リアリズムなどの傾向は三島だけのものではなく、多くの西欧系のモダニズム作家、画家などが共有したテーマであることも踏まえられるべきである。ロマンティシズムを簡単に定義できないことはよく知られている。ロマン主義、反リアリズムというだけでは、議論の基礎は明確にならない。漠然とした一般論と作品分析を区別し、個別の作品の議論をより具体的にして章を繋げれば、もっとよくなっただろう。また、戦後の三島を扱っているが、表象の不可能性というテーマは、天皇制の崩壊と関連している。それに触れなかったのはなぜか。同時代の状況や三島のそれへの反応がもっと書き込まれてもよかった。同時代の作家、たとえば川端などとの対比を意識していれば、もっとわかりやすくなったのではないか。現実的なコンテクストに三島を据えて、脱神話化が行われてもよかったのではないか。

個々の作品分析についてはさらに次のような課題がある。

初期作品における脱自的な昂揚については、ニーチェ的な言説を辿ることも必要だが、一方で三島が耽溺していた日本古典にももっと眼を向けても良かったのではないか。和泉式部の有名な「物思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」の歌をはじめとして、魂の「あくがれ」は『花ざかりの森』の「憧れ」に直結している。時宗の「踊り念仏」もマス・ヒステリア的であるとともにデュオニュソス的な現象でもあったので、こうした日本の古典文化・文学の文脈も取り入れれば論の厚みがさらに増したと思われる。

個別の作品論については、『仮面の告白』を「古典主義期の始まり」とするが、これはよく理解できない。本論文では古典主義を精神と形式の調和ではなく、「崩壊しつつある感受性や過剰な内面を、意味の回復を保証しないまま〈形式〉の内部に仮置きし、持続させようとする方法的志向」を指すとされるが、それは大部分の小説作品に該当する方法である。漱石の『それから』も大江健三郎の『個人的な体験』もそうした側面をもっている。すると「古典主義」という用語をあえて用いる意味が希薄になってしまう。また『仮面の告白』は三島自身も言うように前半と後半の叙述が不

釣り合いで、前半の主題である宿命的な同性愛が後半では異性愛の破綻に置き換わっている。その点では形式的な十全さを欠いており、むしろ反古典主義的な性格を帯びているともいえる。

『禁色』を「醜い精神」の象徴である俊輔と「美しい無智者」である悠一の物語とすることも了解しがたい。俊輔は〈醜い肉体〉の持ち主かもしれないが、大作家として名を成した彼の精神を「醜い」と断じることはできない。悠一は文学にあまり興味がないために俊輔の話し相手にはなれないが、大学を出て数学を趣味にする彼を「美しい無智者」とすることも納得できない。その系譜をなしているのは『愛の渇き』の三郎や『潮騒』の新治であり、原点となるのは『仮面の告白』の肥担ぎの青年であろう。悠一は自己愛者であり、その自己愛から離れていく展開が後半の興趣をなしている。

『潮騒』が「歴史の断絶と記憶の脱政治化が、いかにして「明朗さ」という美学的形式へと変換されうるかを示した地点に、その理論的射程を有している」ということもよく分からない。論者自身が「三　戦後社会の浮上」で述べているように、この作品の世界は戦時から終戦後にかけての歴史的連続性をはらんでおり、政治性もちりばめられている。そうした政治性が新治の非政治的な身体によって相対化されるというのがこの作品に三島が込めた眼目であっただろう。

これらの論点は、強い理論的な枠組みをとった本論文の構成のゆえに付随する課題でもある。

最終審査では、以上のような指摘に対してトウ・ムビ氏は真摯に回答するとともに、それらの課題にこれから取り組んでいくことを明確にした。以上の論文審査と口述による最終試験（公開審査）を踏まえて、審査委員会は、全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。